

## アシスト テクノロジーズ ジャパン株式会社



### ハイテク企業の会計システムを協力的にサポート

最先端の研究開発、国内外の万全なサポート体制で半導体、液晶工場の自動搬送に関する全ての領域をカバーし、次世代の搬送システムをトータルに提供するアシスト テクノロジーズ ジャパン。同社の活動は、半導体、液晶を製造する工場全体の生産効率の向上に大きく寄与している。その結果、拡大する半導体、液晶製造の市場の要求に合わせ、同社も近年急激なビジネスの成長を成し遂げている。成長するビジネス環境にあって、また昨今の内部統制などの新たな要求に応えるためにも、会計システムを効率的かつ健全に運用することは企業にとって極めて重要だ。必要な機能が十分にあり使い勝手がよく、他システムとの連携も容易なInfor FMS SunsyStems（サンシステム）が、成長する同社のビジネスを強力にサポートする。

“ 実際に利用するユーザーにとっていかに使い勝手がいいかが、パッケージ製品を選ぶ際には重要な要素だと考えています。その点ではサンシステムは、現場からの評価がかなり高いアプリケーション製品でした。 ”

アシスト テクノロジーズ ジャパン株式会社  
財務本部 経理部 部長 鎌田勇三氏

**INFOR**<sup>TM</sup>  
be enterprising

## 成長するビジネスを支えるInfor FMS SunSystems

アシスト テクノロジーズ ジャパン株式会社（2007年9月1日付けでアシストシンコー株式会社から社名変更）は、半導体搬送システム、半導体製造装置分野で世界をリードする神鋼電機とアシスト ジャパンの提携により誕生し、最先端テクノロジーを凝縮した次世代搬送システムを提供する企業だ。両者の技術を融合し、半導体および液晶製造工場全体のオートメーションに特化したソリューションを提供している。

半導体や液晶製造技術は日々進化し、生産性の向上と製造コストの削減が求められている。アシスト テクノロジーズ ジャパンは、半導体、液晶搬送システムの開発、設計（ソフトウェアを含む）および製造、据付、販売、サービスを含むあらゆる領域をカバーし、半導体および液晶製造現場の自動化要求に応えている。従来、半導体や液晶を製造する工場では、工場全体をクリーンルーム化する必要があった。これに対しクリーンルームを局所化するAMHS (Automated Material Handling System)の技術を核に、フープと呼ばれる搬送装置をカプセル化することで搬送装置だけをクリーンルーム化し、それをを用いることで工場全体をクリーンルーム化せずに効率的に搬送が行えるシステムを提供している。

半導体や液晶は、いまや人々の生活の中で欠かすことのできない製品テクノロジーだ。そのため、近年急激に成長する市場があり、当然ながらその製造現場で必要となる搬送システムの需要も高まる傾向にある。アシスト テクノロジーズ ジャパンも、2002年に事業を開始して以来、ビジネスは成長を続けている。そのように成長するアシスト テクノロジーズ ジャパンのビジネスを支える、基幹系の会計システムに採用されたのがInfor FMS SunSystems（サンシステム）だ。

## 現場の利便性が高いシステムが業務を効率化する

「サンシステムについては、20年くらい前にすでに使っていたこともあり、使い勝手がいいというのは知っていました。」

財務本部 経理部 部長の鎌田勇三氏は、現場で実際にシステムを利用するユーザーの利便性が高いシステムを採用すべきだという。使い勝手がいいということが、作業の精度を高めることになり、たとえば日々の残高の管理などで人

### 概要：

- 〉 社名 ..... アシスト テクノロジーズ ジャパン株式会社
- 〉 導入製品 ..... Infor FMS SunSystems
- 〉 業種 ..... 製造業(半導体、液晶装置搬送システム)
- 〉 従業員数 ..... 約580名（内海外子会社約190名）
- 〉 本社 ..... 東京都港区

的な間違いが発生しにくくなるというのだ。マネージメントの立場から自らの経験に基づいて一方的に採用製品を決めるというのではなく、必要な機能をきちんと満たしているのか、さらに現場が実際に使い勝手がいいと感じるかといった点を総合的に評価し、結果としてサンシステムの採用が決まった。

それまで利用していたシステムには、いくつか不満な点があったと鎌田氏は言う。勘定科目の個別消し込みができず、各種財務管理レポートの作成、データ抽出も容易には行えないので、手作業による処理も多かったのだ。とくに、旧システムでは外貨建ての管理が基本的に不可能で、米国および日本向けの異なる会計基準に対する会計処理を一度にできず、米国のSOX法に対応するレポートなどの作成が容易には行えなかった。これらの問題点に対し、旧システムを機能アップして解決することも考え、ベンダーに改修の打診を行った。しかしながら、機能拡張には大きな費用がかかるとの回答を得る。

そうであれば、根本的に解決できる新規システムを導入すべきという判断となる。そのため、システム一新のためのプロジェクトが2005年2月から発足する。新規システムでは、旧システムの問題点を解決できる機能を実装しているか、そして、現場の利用者に詳細なデモンストレーション等も行い、使い勝手についてのアンケートを実施し、その評価も含め総合的に採用するパッケージ製品を選ぶこととなる。

「勘定科目の消し込み、外貨の自動処理、他のシステムとのインターフェイスなど必要な機能項目をリストアップし、各製品がそれに対応しているかを評価し点数を付けました。さらにアンケート結果なども点数化し、

評価の重要度に合わせ重み付けをして積算、結果的にサンシステムが最高得点となったのです。」

情報システム部 情報システム部長の石田充利氏は、具体的な製品選定のための評価方法をこのように説明する。機能面の充実だけを考えれば、大規模なERPを検討する方法もあったが、逆に大規模で多機能すぎ、導入も現場での利用も複雑になりがちで使いこなすのが大変だ。もちろん大規模ERPの導入には多大な費用、そして多くの期間も必要となる。そのため、自社の会計システムに求めるスコープを絞り込み、選定対象を広げるのではなく会計に特化したパッケージを選び、上記手法を適用し製品の評価を行ったという。

## 現場作業が効率化し決算時の経理部門社員の残業も減少

導入ステップとしては、2005年2月から新規システムの検討を開始し、5月にはパッケージの選択と新規システムの全体計画策定を終了する。その後4ヶ月程度の期間で導入および他システムとの連携などの作り込みを行った。そして、2005年10月には新システムでプロトタイプ的な利用を早々に開始する。現実的なテスト利用のなかで、不具合を洗い出しその修正を行ったのだ。最終的には、2006年4月に新規システムへの移行を完全に終了した。

短期間でシステムの導入を終えられた理由には、利用現場の責任者である鎌田氏が本プロジェクトに積極的に参画したのも大きい。さらに経理担当者を専任でプロジェクトに参画させるなど、実際にシステムを利用する現場の意見を取り入れている。また、初期の段階から本プロジェクトの理解を求める活動を現場に対し行ったのも、スムーズに新システムに移行できた理由の1つだ。

サンシステムのインターフェースの柔軟性の高さも、早期導入には貢献した。アシスト テクノロジーズ ジャパンでは、国内、海外への出張業務が多く、月に発生する1,000件程度の伝票のうち7割近くは旅費精算などのものだったという。これらの経費伝票の処理を新規にオンライン化し、サンシステムと連携させる仕組みも今回構築している。この連携の仕組みもサンシステムのもつ柔軟な外部とのインターフェースのために、容易に開発ができたという。この経費処理に加え、生産管理、購買、給与などの既存システムとの連携も短期間で実現しているが、稼働後これらシステム連携についてもほとんどトラブルは発生していないという。

完全移行後の2006年4月からの年度を経た結果、新規システム導入効果としては、手作業での伝票処理が大幅に削減され

「各種の既存システムとの連携も、容易に実現できました。とくに生産管理システムとの連携については、思いの外エラーも少なくシステムの移行が完了しました。稼働後も、ほとんどトラブルはありません。」

情報システム部 情報システム部長 石田充利氏

業務が効率化したという。

「決算時期には経理部門の社員が多くの残業を行うという状況があったが、現状では決算月でも通常の月と同じくらいの残業量です。決算だからといって、特別に残業が増えるといった状況はなくなりました。」（石田氏）

「決算時の各種財務管理レポートの作成にかかっていた時間も、5～7営業日で行えるようになりました。結果的に、2営業日は短縮できています。さらに、精度が上がっているのので、後からの手作業での修正なども大幅に削減できました。」（鎌田氏）

## 新たなパッケージ導入で業務の標準化を行う

「パッケージ製品を導入することで、業務を改めて見詰め直し、業務を標準化できるメリットがある」と鎌田氏は言う。1つのやり方で年月が経過すると、システムの問題ではなく運用する「人」の問題で業務の効率化が失われたり、内部統制の面で問題になる部分が出てくる。

それらを解決するには、携わる人の意識を変えていく必要があるという。しかしながら、日々の業務を遂行している状況では、なかなか簡単に意識を変えることができない。それに対して、システムを更新することで個々の業務の洗い出しを行い、システムがこう処理することにはどういう意味があるのかを考えることになる。結果的に、現場から離れた視点で業務を見詰め直すこととなり、業務の標準化につながっていく。

現状、必要な機能が十分に揃っており、さらに現場での使い勝手の良さでサンシステムは評価されている。とはいえ、会

計システムの基本的な機能については、どのパッケージを選択しても、製品ごとに大きな差としては現れにくいのも現状であろう。そのような状況下では、「生産、販売、受注管理といった会計の周辺で必要になる部分も含め、ワールドワイドで展開できるサービスラインナップに期待する」と鎌田氏は言う。使い勝手のいい会計システムを核に、さらなる統合的なシステムの提供が、今後インフォアに求められることになるだろう。

### インフォアについて

インフォアは、先進的な企業に向けてビジネスに特化されたソリューションを提供しています。インフォアのソリューションは、経験を取り入れて、あらゆる規模の企業をより進取的であり、グローバル市場のすばやい変化に適応できるようにします。70,000を超えるお客様を持つインフォアは、企業がエンタープライズソフトウェアプロバイダに期待することを変化させています。詳細については、[www.infor.com](http://www.infor.com)をご覧ください。

日本インフォア・グローバル・ソリューションズ株式会社  
〒163-1035  
東京都新宿区西新宿3-7-1  
新宿パークタワーS35階  
電話：03-5339-4711  
ファックス：03-5339-4700

製品の入手方法についてはお客様の地域のインフォアへご連絡下さい。

